お経にあってこそお参りに

仏舎利塔は、日本でお寺やお墓へと姿をかえ、お彼岸にお参りする習慣が受け継がれています。ところで、お墓参りとは、何を意味するものでしょうか？

それは、先立たれた父母が仏となって、彼岸（ひがん）（お浄土）より私たちに願いを届け、お育て下っているということです。お墓に参り「ご恩のわかる身の上になっておくれよ」という亡き人の呼（よ）び声を聴くことは、仏舎利塔に集まったお弟子や仏歯寺に参る人々と同じく、お釈迦様の説法にあうことではないでしょうか。

お墓に参ることは、お経（＝説法（せっぽう））にあうことです。お経にあうとは、お念仏の教えにあうことです。口にお念仏申し、阿弥陀さまのお慈悲に出会ってこそお参りとなるのです。

連絡先

©監修　本願寺仏教音楽・儀礼研究所

お彼岸

當麻寺蔵『當麻曼陀羅』（部分）

お彼岸のいわれ

お彼岸の中日（春分と秋分にあたる日）、ゆっくりと真西に沈んでいく夕陽……。

「彼岸」とは川の向こう岸、阿弥陀さまのお悟りの世界を意味する言葉です。その阿弥陀さまの国・お浄土は、西の彼方にあるといわれます。先人たちは、真西に沈む夕陽を見て、彼の岸・西方極楽浄土に思いを馳せました。

『仏説観無量寿経』には、阿弥陀さまの極楽世界を思い描くための方法（観法）が説かれており、その第一は、「日想観」といいます。これは、日没の光景を見て、その後、眼を閉じても、夕陽の姿を思い描けるようにするのです。

太陽が真西に沈むお彼岸の頃は、日想観の実践に最も適した時期といえましょう。お彼岸の一週間は、このようなみ教えにささえられて、阿弥陀さまのことを想う“仏教週間”として、広く一般に定着してきました。

浄土真宗では

浄土真宗では、日想観のような難しい観法はしませんが、七高僧の一人である善導大師が、「阿弥陀さまは西の岸から『必ず救うぞ、われにまかせよ』と私たちによびかけておられる」とお示しくださったことから、本願寺でも第八代宗主蓮如上人の時代より彼岸会をお勤めしています。このように“彼岸の心”は、大切に受け継がれているのです。

お彼岸にあたり、先にお浄土へ往かれた方々に導かれて、彼の岸・阿弥陀さまの国へと続くただ一つの道、お念仏の大道を歩ませていただきましょう。

墓参り

仏歯にあう

スリランカには、お釈迦さまの歯が納められている仏歯寺というお寺があります。（写真）尊いお説法をつむぎだしたこの歯に、今も世界中から参拝者が絶えません。

黄金の舎利容器　（撮影：丸山勇）

お釈迦さまがお亡くなりになるとき、嘆き悲しむお弟子たちに「私にあいたければ、仏法を聞いてくれよ。それは私とあっていることになるのだよ」と仰せになりました。

お釈迦さまのご遺骨は分けられて、仏舎利塔に納められました。お弟子たちはそこに集い、仏法を語り合い、お釈迦さまを懐かしんだのです。それは、この上ない恵みになったに違いありません。